

連載

# 司書・司書教諭が知っておくべき

## 学校図書館のための情報リテラシー

### 第5回 情報リテラシーに関する海外の学術研究(2)

日本女子大学 家政学部家政経済学科 准教授 後藤敏行

前回に引き続き、情報リテラシーに関する学術論文をレビュー(概観、批評)します。今回は量的研究(統計的手法を用いた研究)を取り上げます。

#### タイ王国の高校生

Saechanらは、タイ王国の最南端の複数の県で、高校生の情報リテラシーの水準、および情報リテラシーに関して高校生が直面する問題を調査しました。それらは変数(性別、文系か理系か、GPA (Grade point average: 成績平均値)、学校の所在地)によって異なるだろうという仮説に本研究は立ちました。

仮説の背景には、女性より男性のほうが情報リテラシーが高い(またはその逆)。どちらの研究結果もある)、情報リテラシーと学業成績には関連がある、文系か理系かが情報リテラシーに影響を与えているといったことを各国の先行研究が示していることがあると思われ(このことを論文は明記していませんが、文脈的にそう読めます)。

本研究では、層化無作為抽出法(母集団をいくつかの層に分け、各層から独立に、無作為(ランダム)に標本(サンプル)を取り出す方法)に

よって三九〇人の生徒たちを抽出しました。タイ王国の生徒たちのために作られた、情報リテラシーや情報通信技術(ICT)の指標に準じて、情報リテラシーの試験および質問紙が設計されました。前者の試験では、情報リテラシーに関する七つの基準(図1)について、計五六の設問によって、生徒たちの水準を五段階で

- 基準1: 学習や日常生活に関する情報の重要性や必要性を認識する。
- 基準2: 情報資源にアクセスすることができる。情報検索ツールの利用法を知っている。
- 基準3: 必要な情報を分析し、評価し、選択することができる。
- 基準4: 情報を収集し、整理し、総合し、利用することができる。
- 基準5: 情報を利用して、独創的な仕方での新たな作品や知識を作り出すことができる。
- 基準6: 情報に関する問題について、倫理観を持ち、法を尊重し、社会に対して責任感を示す。
- 基準7: さまざまな仕方でのICTを利用するための知識や必要なスキルを有する。

図1 情報リテラシーの水準

判定しました。後者の質問紙では、情報リテラシーに関して生徒たちが直面する問題を六つの側面(図2)に分け、計三〇の質問によって、それぞれの程度を判定しました。判定にはSPSSという統計解析ソフトウェアを用いました。その結果、次のことが明らかになりました。

- 側面1: さまざまな情報源から情報を探し出す。  
[筆者注:「こうした側面に関して問題だと感じていることは何か」のような調査だったと思われます]
- 側面2: 情報に関するツールやICTのハードウェア、ソフトウェアを利用する。
- 側面3: 情報を探索する。
- 側面4: さまざまな状況下で情報を利用する。
- 側面5: 情報リテラシーを支援する活動。
- 側面6: ICTのリテラシーを支援する活動。

図2 情報リテラシーに関して直面する問題

●総合的に見て、生徒たちの情報リテラシーの水準は、Pas、(五段階の下から二番目)だった。「基準3:必要な情報を分析し、評価し、選択することができる」および「基準7:さまざまな仕方でのICTを利用するための知識や必要なスキルを有する」に限っては「Fail」(五段階中最低)だった。複数の先行研究と同様の結果となった。

●各変数が生徒たちの情報リテラシーの水準に影響を与えていた。すなわち、次のとおりであった。  
・男子生徒より女子生徒のほうが情報リテラシーの水準が高かった。

・文系の生徒よりも理系の生徒のほうが情報リテラシーの水準が高かった。

・GPAが高い生徒は情報リテラシーの水準も高かった。

●情報リテラシーに関して生徒たちが直面する問題は、六つの側面すべてで、moderate(中々らしい)の三段階中の二番目)だった。

●情報リテラシーに関して生徒たちが直面する問題には、「性別」「文

系か理系か」、「GPA」の各変数による、統計的に有意な差は認められなかった。「学校の所在地」という変数のみが有意な影響を与えており、都会の学校のほうが問題が少なくに思われた。

●情報リテラシーに関して直面する問題について、生徒たちの自由回答では次のような事項が上位に挙げられた。インターネットアクセスのある生徒用コンピュータが十分である、インターネットやWi-Fiの電波が弱い、インターネットやWi-Fiにアクセスできる時間が制限されている、本が古い、イヤホンが使えない、スピーカーが使えない、など。これらは、生徒たちがICTに敏感であることや、前述のとおり「基準7」において生徒たちの情報リテラシーの水準が低いことに関連している。

これらの知見に基づき、以下の事項をSaechanらは提言しています。

●生徒たちの情報リテラシーを向上させるために、教員や図書館員、ICT担当者が参加する協働的な教育を活用し、教育・学習活動を再設計すべきである。

●教育を管轄する部局や管理職は、教室や図書館、コンピュータ教室で

利用できる、最新のICT設備を生徒たちに提供するための、ガイドラインや基準を設けるべきである。

前回紹介した研究と同様、本研究にも批判、あるいは、本研究から何が導き出されるかをしっかりと考えることは可能だと思われ(一例を挙げれば、Saechanらの前述の提言は、具体的な細かいものというよりは、今後の全体方針を示すものといえます。たしかに、情報リテラシーに関して直面する問題について、ICT環境の不備に関するものが生徒たちの自由回答で上位に挙がりましたので、提言の特に二点目は、ガイドラインや基準を実現するところまで持つていくことができれば、有効であるように思います)。

しかし、「男子生徒より女子生徒のほうが情報リテラシーの水準が高かった」、「文系の生徒よりも理系の生徒のほうが情報リテラシーの水準が高かった」のような点も本研究は指摘しています。せっかくなので、今後の全体方針を示すにとどまらず、こうした点をさらに掘り下げるとよいと個人的に感じます。

例えば、原因や背景が気になります。なぜ、男子生徒より女子生徒が、

文系の生徒より理系の生徒が、高い情報リテラシーを備えていたのでしょうか。ひよっとすると、情報リテラシーの水準を判定するための試験を本研究は行いましたが、女子生徒や理系の生徒が得意としがちな設問だったかもしれず、設問が異なれば、異なる結果になっていたかもしれません。

また、よりきめ細かい対策も検討できると思われ(仮に、性別や文系/理系で情報リテラシーに差があることが確定的である場合、男子生徒/女子生徒、文系の生徒/理系の生徒にはそれぞれ、情報リテラシーとひとことで言っても、その中で得意分野と不得意分野がある、ということになるでしょう。得意分野をできるだけ伸ばし、不得意分野をできるだけなくすことを検討するよくな後続の研究があります。情報リテラシーを一律に考えるのではなく、性別や文系/理系など、生徒の特性によって対策を使い分けるといふ発想は、わが国でも取り入れることができるかもしれません。その意味でも本研究はヒントになると考えられます。

今回は、国内の文献に目を向けてみたいと思います。

※: Saechan, Chuanichit, Srivastava, Vorasit. Level of Information Literacy among uppersecondary school students in Thailand and the problems they encounter. Journal of Educational Media & Library Sciences, 2018, vol. 55, no. 1, p.71-81.